

マタイ福音書の7章、山上の説教の「聖なるものを犬に与え、豚に真珠を与える」行為は、旧約聖書の律法に何度も命じられているように、賄賂のことではないですか？ Exd 23:8 あなたは賄賂を取ってはならない。賄賂は人の目をくらまし、正しい者の事件をも曲げさせるからである。そう捉えると7:1-5の「さばき」と偽善者の文脈にも合うのではないか。犬はユダヤ人指導者、豚は異邦人の手先である取税人が連想されます。

マタイによる福音書7章の「聖なるものを犬に与え、豚に真珠を与えるな」という教え（マタイ7:6）は、興味深いテーマです。あなたの解釈、特にこれを旧約聖書の律法、具体的には賄賂に関する戒め（出エジプト記23:8など）と関連づける考え方には独自性があります。しかし、伝統的な解釈や文脈を踏まえた場合、やや異なる視点が提示されています。

1. 伝統的解釈の文脈

この箇所は、山上の説教の一部であり、主に道徳や倫理について教えています。文脈的に見ると、マタイ7:1-5では「さばくな」というテーマが取り上げられています。この教えの中で、他者を裁く際には自己の欠点をまず確認し、自分を正すことが強調されています。そして、6節に入ると、「聖なるものを犬に与え、真珠を豚に投げてはならない」という言葉が続きます。これは、神聖な教えや貴重な真理を不適切な相手に与えてはならない、という警告だと伝統的に理解されます。

「犬」と「豚」は、当時のユダヤ文化において、清くないもの、あるいは霊的に受け入れない人々を象徴していました。したがって、キリストの教えを軽蔑する者や、霊的な真理を受け入れる準備ができていない者に、霊的な教えを強引に伝えることに対する警告と捉えられることが多いです。

2. 賄賂との関連

出エジプト記23:8の「賄賂」の禁止は、主に裁判において正義が歪められることを避けるための教えです。賄賂は人の目をくらまし、正しい判断を妨げるものとして、旧約の律法においても強く非難されています。しかし、マタイ7:6の「犬に与えるな」「豚に与えるな」という教えが、直接的に賄賂に関する警告と結びついているという解釈は、伝統的な解釈ではあまり見られません。

賄賂は、司法における腐敗を象徴するものですが、マタイ7章の文脈は、むしろ霊的な教えや真理の取り扱い方について語っています。「犬」や「豚」という表現は、一般的には異邦人や罪人（取税人を含む）を指すことが多く、霊的に清くない者たちに対して、神聖なものを無闇に与えることの危険性を強調しています。

3. 「さばき」と偽善者の文脈

あなたが指摘するように、マタイ7:1-5の「さばき」に関連して考えることも可能です。偽善的な裁きは、自分の欠点を見ずに他者を裁く行為であり、それに対する批判がここで行われています。この「偽善者」としての裁きと、続く6節の「犬に聖なるものを与えるな」という警告を関連づけるならば、自分の霊的な目が正しくない状態で、他者に教えを強要したり、不適切に教えを伝えることが、霊的な賄賂に近い行為とみなすことも可能かもしれません。

結論として、マタイ7:6を出エジプト記の賄賂禁止と直接結びつける解釈は興味深いものの、伝統的にはこの箇所は霊的な教えや真理をどう取り扱うかに関する警告として理解されています。ただし、「さばき」と偽善者の文脈において、霊的な真理を軽々しく扱うことが賄賂的な行為と考える余地はあるかもしれません。

イザヤは言っています。 Isa 56:11 この犬どもは強欲で、飽くことを知らない。彼らはまた悟ることのできない牧者で、皆おのが道にむかいゆき、おのおのみな、おのれの利を求めらる。

イザヤ書56章11節の「この犬どもは強欲で、飽くことを知らない。彼らはまた悟ることのできない牧者で、皆おのが道にむかいゆき、おのおのみな、おのれの利を求めらる」という言葉は、イスラエルの指導者たちの墮落と自己中心的な行動を厳しく非難するものです。

ここで「犬」という表現が使われていますが、旧約聖書の時代において「犬」はしばしば軽蔑的な意味合いを持つ言葉として用いられており、不純、または汚れたものを象徴していました。特にこの箇所では、強欲で利己的な振る舞いをする宗教指導者やリーダーを指す比喻として「犬」が使われています。

イザヤがここで批判しているのは、神の民を導くべき立場にある牧者たち（宗教指導者や政治的リーダー）が、自分の欲望や利益を優先していることです。彼らは本来ならば神の意志に従い、正義と慈しみを実践し、民を導く役割を果たすべきですが、ここではその責任を放棄し、自己の利益ばかりを追求しています。「悟ることのできない牧者」とは、彼らが本来の使命や神の教えに対して盲目であることを指します。

マタイ7:6との関連

あなたが最初に指摘したマタイ7:6の「犬に聖なるものを与えるな」という箇所との関連を考えると、両者に共通するテーマがあるように見えます。それは、神聖な教えや役割を汚し、不適切に扱う者たちへの批判です。イザヤ書56章では、強欲で自己中心的な指導者たちが「犬」として描かれ、彼らが神の意図を無視し、自分の利益を追求していると非難されています。同様に、マタイ7:6の「犬に聖なるものを与えるな」という言葉は、霊的な真理や神聖なものを理解しない、またはそれを軽蔑する者たちに対して、それを分かち合うことの危険性を警告しています。

この観点から見ると、両方の箇所は神聖なものをどのように扱うべきか、そしてその扱い方によって何が失われるかについての教えだと言えます。指導者や教師が強欲や自己利益に走るとき、神の教えが軽視され、歪められ、人々に対する悪影響が広がることが強調されています。

あなたの最初の質問に戻ると、旧約の「犬」と新約の「犬」には、霊的に神聖なものを軽んじたり、それに対する適切な敬意を欠く者という共通のテーマが見られます。この点で、旧約の賄賂の戒めと、新約での「犬や豚に神聖なものを与えない」という警告を結びつける考えは、一部の共通点を持っているとも言えます。

山上の説教を詳しく適用するヤコブの手紙、その2章では、人をえこひいきするなとお教えます。賄賂は、へつらうことの一つです。あわれみのないさばきが取り扱われます。正しくさばくことです。

確かに、ヤコブの手紙2章は「えこひいき」を戒める教えが強調されています。この教えを通じて、信仰者に対して公平で正しい裁きを行うことが求められています。あなたが指摘されている「賄賂」が、ヤコブの手紙における「えこひいき」や「へつらい」と関連する点には重要な洞察があります。

1. ヤコブの手紙2章の背景とテーマ

ヤコブの手紙2章の冒頭では、裕福な者を特別に扱い、貧しい者を軽んじるような行為が非難されています。この「えこひいき」は、物質的な富や外見によって人を差別し、正義や公平な判断を歪めるものです。ヤコブは、キリスト教信仰が外見や地位ではなく、神の前での平等な価値観に基づいて行動することを強調しています。具体的には、2章2-4節で、裕福な人と貧しい人が教会に来たとき、どのように扱われるかという事例を取り上げ、信者たちが裕福な人を優遇し、貧しい人を差別する行為を批判しています。

「あなたがたは、自分たちのうちに悪い考えで差別をしているのではないか」と指摘し（ヤコブ2:4）、このような差別的な態度は、神の視点では不正であり、信仰に反する行為であると教えています。

2. 賄賂とえこひいき

「賄賂」と「えこひいき」は、確かに関連があります。賄賂とは、通常、金銭や利益を通じて他者に不当な影響を与え、公正な判断を歪める行為です。えこひいきも、似たような形で特定の人々に対して不正に優遇することです。ヤコブの手紙での「えこひいき」の非難は、まさにこのような不正な判断を戒めており、公平で正しい裁きを求めています。

ヤコブ2:9では、「もしあなたがたが人をえこひいきするならば、罪を犯している」と明言し、偏った判断が神の律法に反することを強調しています。この文脈での「えこひいき」は、賄賂を受け取って富める者を優遇する行為と同様に、神の目には罪深い行為とされているのです。

3. あわれみのないさばきと正しいさばき

ヤコブ2:13では、「あわれみのないさばきを行う者には、あわれみのないさばきが下されます。しかし、あわれみはさばきに打ち勝ちます」と述べられています。これは、他者に対してあわれみを持たず、厳しい裁きを行う者は、自らも神の前で同様に裁かれることを警告しています。ここでの「正しいさばき」とは、公平であり、偏見やえこひいきのないさばきを意味します。また、正義に基づいた裁きの中でも、あわれみを持つことの重要性が強調されています。

この教えは、マタイの福音書7章の「さばいてはならない」という教えとも共鳴しています。両者とも、他者を裁く際には自分自身も裁かれるという警告を含み、正しい判断を行うためにはあわれみや謙虚さが必要であることを教えています。

4. 山上の説教との関連

ヤコブの手紙は、しばしば「新約聖書の箴言」と呼ばれ、道徳的な教訓や信仰の実践に重点を置いていますが、特に山上の説教（マタイ5-7章）との関連が指摘されています。山上の説教での「正しいさばき」の教えとヤコブの手紙の「えこひいき」の戒めは、神の正義と公平さを強調する点で共通しています。

山上の説教における「犬に聖なるものを与えるな」や「裁かれないように裁くな」という教えは、霊的な理解を持たない者に対して無分別に神の真理を分かち合わないようという警告とともに、不適切な裁きや偽善的な行動を戒めています。ヤコブの手紙でも、他者に対する正しい態度と、神の目における公平さが強調されており、両者は信仰の実践において密接に結びついていると言えます。

結論

ヤコブの手紙2章で教えられている「えこひいき」を戒める教えと、賄賂の禁止は、共に人間の偏見や不正な判断を非難するものであり、信仰における正しいさばきの重要性を示しています。ヤコブの教えは、山上の説教の教えと一致し、特に他者を公平に、あわれみを持って扱うことが信仰生活において求められることを強調しています。

7:15の偽預言者は、強欲なおおかみと呼ばれます。Ezek 22:27の支配者は、おおかみのように、不正の利を得るために人々を滅ぼします。

マタイ7:15の「偽預言者は、羊の衣を着てやって来るが、その内側は貪欲な狼である」という教えは、偽預言者の危険性を警告するものです。この偽預言者は、表向きは善良で無害な存在のように見えますが、内心は強欲で、自己利益のために人々を滅ぼす存在です。この表現は、エゼキエル書22章27節の「その中のつかさたちは、おおかみが獲物を引き裂くように、人々を滅ぼし、不正な利を得る」という描写と深く共鳴しています。

1. マタイ7:15と偽預言者

マタイ7:15の文脈では、イエスは山上の説教の中で、弟子たちに偽預言者に警戒するように促しています。偽預言者は、表向きは善人のように装いますが、実際には彼らの教えや行動は人々を惑わせ、霊的な危害を与えるものです。「貪欲な狼」という比喩は、彼らが自己の欲望や利益のために他者を犠牲にする存在であることを強調しています。

ここでの「羊の衣」は、偽預言者が無害で無垢な存在に見えることを示していますが、「内側は貪欲な狼」という言葉は、彼らが実際には危険で破壊的であることを表しています。偽預言者は、自己の利益や権力のために教えを歪め、人々を霊的な危険にさらす存在です。

2. エゼキエル書22:27との関連

エゼキエル書22章27節の「その中のつかさたちは、おおかみが獲物を引き裂くように、人々を滅ぼし、不正な利を得る」という言葉は、イスラエルの指導者たちの腐敗と不正行為を非難しています。エゼキエル書22章では、イスラエルの罪と墮落、特にその指導者たちの不正が描かれています。ここでの「おおかみ」は、権力者や指導者たちが、不正な利益を得るために人々を搾取し、滅ぼす姿を象徴しています。

この箇所も、指導者たちが自らの強欲や権力欲のために神の民を犠牲にしていることを指摘しており、マタイ7:15と共通するテーマを持っています。どちらも「狼」という表現を通じて、自己の利益のために他者を犠牲にする強欲なリーダーたちの危険性を強調しています。

3. 強欲と不正な指導者の象徴

マタイ7:15の偽預言者やエゼキエル22:27の指導者たちは、共に強欲で不正な存在として描かれています。彼らは、本来の使命や責任を果たすどころか、むしろ人々を傷つけ、霊的にも物質的にも搾取します。これらの箇所における「狼」は、自己利益を優先し、他者を犠牲にする破壊的な力を象徴しています。

特に、エゼキエル書22章では、イスラエルの指導者たちが神の律法を無視し、正義を歪め、弱者を搾取していることが非難されています。彼らは、権力を持ちながらも不正を行い、神の前で裁かれるべき存在として描かれています。

4. 偽預言者と不正な支配者の共通点

マタイ7:15の偽預言者とエゼキエル22:27の不正な支配者は、共に人々を欺き、自己の利益を追求する点で一致しています。彼らは、神の教えやその使命に対する裏切り者であり、表向きは信頼される存在であるにもかかわらず、内心は人々を傷つける危険な存在です。

これらの偽預言者や不正な指導者は、神の民を守り導くべき役割を持ちながら、その責任を果たさず、むしろ神の民を滅ぼす存在です。彼らの強欲や不正行為は、神の怒りを引き起こし、最終的には神の裁きを受けることが予告されています。

結論

マタイ7:15の偽預言者とエゼキエル書22:27の支配者たちは、共に「狼」として描かれ、強欲で不正な行動を通じて他者を滅ぼす存在として非難されています。どちらの箇所も、神の民に対する危険な指導者や教師の存在を警告し、霊的な慎重さと正しい判断を求めています。これらの教えは、信仰者に対して、外見や表面的な魅力に惑わされず、真実に基づいた判断を行うことの重要性を強調しています。

黙示録22:15の犬どもですね。

はい、黙示録22:15に出てくる「犬ども」という表現は、他の聖書の箇所とも関連があり、特定の意味を持っています。黙示録22:15では、新しいエルサレムに入れない者たちについて記されています。

「外には、犬どもや、魔術を行う者、不品行を行う者、人を殺す者、偶像を拝む者、偽りを好み、行う者がいる」（黙示録22:15）

ここで「犬ども」とは、道徳的・霊的に墮落した人々を象徴しており、特に神の清さや律法に反する生活を送る者たちを指しています。この「犬」という表現は、聖書の中で繰り返し使用されており、不道徳で清くない者を指す比喩として用いられています。

1. 犬の象徴

聖書の文化において、「犬」は通常、軽蔑的な意味で使われます。特にユダヤ教の文脈では、犬は汚れたもの、無価値なもの、あるいは神に背を向けた者たちの象徴です。黙示録22:15において「犬ども」と呼ばれる者たちは、神の律法や教えに従わない人々、特に道徳的に腐敗している者を表しています。

これは、エゼキエル書22:27やマタイ7:15での「狼」と同様に、強欲で自己中心的な人々、あるいは偽預言者や腐敗した指導者を象徴する表現としての「犬」の用法と重なります。

2. 新しいエルサレムの外にいる者たち

黙示録22:15では、これらの「犬ども」を含む者たちが「外にいる」と言及されています。これは、新しいエルサレムに入る資格がない者、すなわち神の国に入れない者を指しており、彼らは霊的に清くないため、神の臨在から排除されていることを示唆しています。ここで列挙されている「犬ども」や「魔術を行う者」などは、神に逆らい、罪にまみれた生活を送っている者たちです。

3. 霊的清さと不正の対比

黙示録全体は、神の清さと正義を強調し、最終的な勝利が神に従う者たちに与えられるというテーマを持っています。それに対して、偽預言者や不正な指導者、道徳的に墮落した者たちは排除されます。黙示録22:15の「犬ども」もその一環として、神に背を向けた者たちを象徴しています。

4. 他の関連箇所とのつながり

「犬」という表現は、フィリピ書3:2でも使われており、パウロは「犬どもに気をつけなさい」と警告しています。ここでは、ユダヤ主義者や信仰を歪める者たちを「犬」として警告し、偽りの教えに従うことの危険性を強調しています。このように、聖書全体で「犬」という表現は、墮落や神の教えに反する人々を象徴するものとして使われています。

結論

黙示録22:15の「犬ども」は、聖書全体で使われる「犬」の象徴的意味を踏襲しており、道徳的・霊的に墮落し、神の教えから逸脱した者たちを指しています。これらの者たちは、神の清さに触れることができず、新しいエルサレムの外に留め置かれることとなります。この表現は、エゼキエルやマタイ、パウロの教えともつながり、偽預言者や腐敗した指導者への警告として理解することができます。

偽善者、偽預言者である当時のユダヤ人の指導者たち（犬ども、おおかみ）に、聖なるもの（いけにえの肉）を与えるな。ローマ人やその手先である取税人たち（豚）に、真珠（金銭）を与えるな。さばきをする者の目を曇らせるな。というのがマタイ7:6の教えだと思われれます。伝統的な解釈ではありませんが。

あなたの解釈は、非常に興味深く、聖書の様々な箇所を関連付けながら、マタイ7:6の教えを深く掘り下げている点が独創的です。伝統的な解釈とは異なるものの、聖書全体を横断的に解釈するアプローチは聖書のメッセージを多角的に捉える一つの方法です。以下に、あなたの解釈をさらに整理し、考察します。

1. 犬と豚の象徴

あなたの解釈では、「犬」と「豚」が具体的なグループに当てはめられています。

- 「犬」は、偽善者や偽預言者、つまり当時のユダヤ人の指導者たち（特に律法学者やパリサイ人）を指しており、彼らが強欲で不正を行う存在として描かれています。エゼキエル書22:27やイザヤ書56:11と結びつけ、彼らを「強欲な狼」として描く伝統とも一致します。
- 「豚」は、ローマ人や彼らの手先である取税人を指すとされています。取税人たちは、ローマ帝国のために税を徴収することでユダヤ人社会から嫌われていました。彼らは、霊的に汚れたものとみなされることが多く、「豚」という不浄な動物に喩えられることが解釈の基礎となります。

2. 聖なるものと真珠

次に、「聖なるもの」と「真珠」の象徴的な意味が、あなたの解釈では以下のように解釈されています。

- 「聖なるもの（いけにえの肉）」は、ユダヤ人の宗教儀式において神聖視されるものを指し、これを偽善者たちに与えるなという教えは、彼らとその神聖さを正当に扱わない、あるいは霊的に不適切な態度でそれに接することを警告しています。これは、イエスが偽善的な指導者たちに対して厳しい批判を行った場面と一致します。
- 「真珠（金銭）」は、ローマの手先である取税人に金銭を与えることを戒めるものと解釈されています。これは、取税人が不正な利益を得るために利用する金銭の象徴であり、彼らに不正を助長するために金銭を与えてはならないというメッセージと捉えられます。

3. 公正なさばきと賄賂

あなたが指摘される通り、これらの解釈は「公正なさばき」と「賄賂」の問題に通じます。

- 「さばきをする者の目を曇らせるな」というのは、出エジプト記23:8の教えに基づくもので、賄賂が公正な判断を歪めることを警告しています。偽善的なユダヤ人指導者（犬）に「聖なるもの」を与えることや、取税人（豚）に「真珠」を与えることは、彼らの不正を助長し、公正な裁きを曇らせる行為だと解釈されます。

4. この解釈の特徴

あなたの解釈では、マタイ7:6を、特定の人々に対して神聖なものや財産を与えないようにという、道徳的な警告として捉えています。これは、聖書の他の箇所（例えば、偽預言者や腐敗した指導者に対する警告、賄賂に関する戒め）と結びつけることで、マタイ7:6を社会的、政治的な文脈に引き寄せたものです。

伝統的な解釈では、マタイ7:6は霊的な真理を受け入れる心のない者にそれを無駄に与えないようにという教えとされていますが、あなたの解釈はそれをより具体的で社会的な問題に結びつけています。この解釈においては、マタイ7章全体が「公正な裁き」に焦点を当てているという文脈で、特に偽善的な指導者や取税人の不正を警戒するメッセージとして読まれています。

5. まとめ

あなたの解釈は、聖書のさまざまな箇所を統合し、偽善的な指導者（犬ども）や取税人（豚）に神聖なものや金銭を与えることが、賄賂や不正な行為につながり、公正なさばきを曇らせることになるというメッセージとして、マタイ7:6を理解しています。

このように、マタイ7:6を当時のユダヤ社会の宗教的・政治的背景に照らして解釈することは、新たな視点を提供してくれます。伝統的な解釈と異なるものの、深い聖書的な洞察に基づいており、独自の価値を持っています。

神さまは、不正をすることも、えこひいきすることも、賄賂を取ることもない（2歴代誌19:7）。天の父が完全であられるように、完全な者とならなければならない。

確かに、2歴代誌19:7に記されているように、神は不正を行わず、えこひいきや賄賂を取ることもありません。この箇所は、神の完全な公正さと義に基づいた裁きの姿を強調しています。

「今、あなたがたの上に主への恐れがあるようにしなさい。主、私たちの神には、不正も、えこひいきも、賄賂を取ることもない」（2歴代誌19:7）

この教えは、ヤコブの手紙2章で強調される「えこひいきのない信仰」と共鳴しています。また、マタイの福音書5:48に記された「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全でありなさい」という教えとも直接つながっています。イエスは、神の完全さを基準として、信者にもそのように生きることを求めているのです。

1. 神の完全な公正さと義

聖書の中で、神の本質の一つとして強調されるのは、完全な公正さと義です。神は、決して不正やえこひいきを行わない方であり、賄賂などで判断を曲げることはありません。この特徴は、神の裁きが完全であり、人間的な偏りや不正の影響を受けないことを示しています。

2. 信者に求められる完全さ

イエスが教える「完全な者となる」ことは、私たちが神の性質、特にその公正さやあわれみを反映する生き方をすることを求めています。これは、単に道徳的に良い行いをすることではなく、神のように無私で、正義に満ち、すべての人に公平であるような生き方を意味します。

特に、山上の説教（マタイ5-7章）の文脈で見ると、「完全でありなさい」という教えは、神のあわれみと正義、そして敵に対する愛に基づいた生活を求めています。私たちも、不正を避け、えこひいきや賄賂を拒絶し、誰に対しても公正であるべきだという教えが、ここに示されています。

3. 賄賂やえこひいきの拒絶

賄賂やえこひいきは、しばしば不正や腐敗の象徴として聖書で批判されます。2歴代誌19:7では、神がそのような行為を行わないことを強調し、神の裁きがどれほど正しいかを示しています。同時に、私たちに對しても、神のように不正を避け、偏りなくすべての人を愛し、公正に接することが求められています。

ヤコブの手紙2章でも、「信仰に基づく行い」の一環として、えこひいきをせずに貧しい者にも富んだ者と同じように接することが強調されています。この公平さこそが、信仰を実際の生活において表現するものです。

4. 神の完全さを目指す信仰生活

イエスの教えに基づいて生きることは、神の完全さを目指す生き方をすることです。これは、人間としての不完全さを自覚しつつも、神の恵みによって正義とあわれみを実践しようとする努力を意味します。公正であることは、その中心にあり、誰に対しても公平であり、誰かを特別に扱ったり、偏見で判断したりしないことが重要です。

結論

あなたの言う通り、神は不正を行わず、えこひいきや賄賂を取ることがない存在であり、そのように信者も生きることが求められています。イエスは、私たちが「天の父が完全であられるように、完全な者」となることを教えられました。それは、公正であり、偏見や不正を避け、すべての人に公平に接することを意味します。賄賂やえこひいきを拒絶し、神の義を実践することこそが、信仰者としての姿勢であり、神の完全さに近づく道です。

正義と公正を行うことは、アブラハムの子らである天の御国の民にふさわしいことです。創世記18:19

確かに、正義と公正を行うことは、アブラハムの子孫である神の民にふさわしい行いであり、聖書全体において重要なテーマです。創世記18:19では、神がアブラハムを選ばれた目的の一つが、彼とその子孫が「正義と公正」を行うことであることが述べられています。

「わたしが彼を選んだのは、彼がその子孫と家族に命じて、主の道を守り、正義と公正を行わせるためであり、そのために、主がアブラハムに約束したことを彼に成就させるためである」（創世記18:19）

この節では、神がアブラハムを特別な使命に召した理由として、彼とその子孫が「正義と公正」を実践し、神の道を歩むことが強調されています。

1. アブラハムの使命と正義

アブラハムは、信仰の父として、神に選ばれ、神の祝福のもとに多くの子孫を残す約束を受けました。しかし、その祝福は単に物質的な繁栄や子孫の増加に留まらず、「**正義と公正**」を実践することを通じて実現されるものであることが示されています。アブラハムの子孫は、神の律法を守り、正しい道を歩むことを求められました。

「正義」と「公正」は、アブラハムの家系が他の民族からも一目置かれる特徴であり、神が約束を成就する際の基盤です。神の民は、信仰だけでなく、日々の生活においても正しい行いをすることが期待されています。

2. 天の御国の民にふさわしい行い

イエスは、アブラハムの子孫としての信仰を持つ者が「天の御国の民」として正義と公正を行うことを強調しました。たとえば、山上の説教では、単なる律法の形式的な遵守を超えて、内面の清さと行動における正義が求められています（マタイ5-7章）。

「あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさるものでなければ、決して天の御国に入ることはできません」（マタイ5:20）

この教えは、単なる形式的な宗教行為を超えて、本物の正義を追求し、他者に対しても公平であることが求められています。これは、アブラハムの子孫としての役割と一致しています。神の民は、神が正しい方であるからこそ、その正義を反映する生き方をする必要があります。

3. 正義と公正の実践

正義と公正を実践することは、社会的な生活においても重要な役割を果たします。旧約聖書には、神がイスラエルの民に、正しい裁きと公正な扱いを求める命令が数多くあります。たとえば、申命記16:20では、「正義を、ただ正義のみを追い求めなさい」と命じられています。

また、ミカ書6:8には、神が人間に求めていることとして「公正を行い、誠実を愛し、謙遜に神と共に歩む」ことが記されています。これらの教えは、アブラハムの子孫として生きる者が、神との正しい関係を持ちつつ、他者にも公正であるべきだというメッセージです。

4. 神の国と正義のつながり

イエスが教えた天の御国の原則は、正義と公正が中心にあります。イエスは、神の国に入るためには、自分自身の利己的な欲望を捨て、神の正しい道を追い求めることを強調しました。

「まず神の国とその義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて加えて与えられます」（マタイ6:33）

ここでの「義」は、正しい行い、公正な裁き、そして他者に対するあわれみを含む、神の正義そのものを指しています。アブラハムの子孫として生きる者にとって、天の御国にふさわしい行いとは、この「義」を追い求め、それを生活の中で実践することです。

結論

創世記18:19で示されているように、アブラハムの子孫、すなわち天の御国の民は、「正義と公正」を行うことが求められています。これは、神が期待される信仰の実践であり、神との契約に基づいた生き方です。イエスもまた、信者たちに「天の父が完全であるように、あなたがたも完全でありなさい」と教え、正義と公正を中心に据えた生活を促しました。

私たちは、神の正義を模範とし、日々の生活の中で正しく公正に行動することを通じて、アブラハムの子孫として、また天の御国の民としての役割を果たすことができます。